日曜AM 9:00～9:30（フジテレビ系列）放送

第１話

「妖怪！ 見上げ入道」

フジテレビ
制作 読売広告社
東映

企画	プロデューサー	製作担当	原作	シリーズディレクター
清水賢治（フジテレビ） 鈴木専哉（フジテレビ） 木村京太郎（読売広告社）	清水慎治	樋口宗久	水木しげる （コミックボンボン テレビマガジン たのしい幼稚園 おともだち）連載 （講談社）	西尾大介

脚本	演出	音楽	キャラクターデザイン	総作画監督	美術デザイン
武上純希	西尾大介	和田薫	荒木伸吾	姫野美智	浦田又治

役職	氏名
作画監督	
美術	
原画	
仕上	
撮影	
編集	片桐公一
録音	今関種吉
音響効果	森川永子
選曲	西川耕祐
記録	
製作進行	
演出助手	

【オープニング】

ゲゲゲの鬼太郎

作詞／水木しげる
作曲／いずみたく
唄・編曲／憂歌団
（wea japan）

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
朝（あさ）は寝床（ねどこ）で　グーグーグー
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　学校（がっこう）もしけんも
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌（うた）おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
昼（ひる）はのんびり　お散歩（さんぽ）だ
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　会社（かいしゃ）も仕事（しごと）も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌（うた）おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
夜（よる）は墓場（はかば）で　運動会（うんどうかい）
たのしいな　たのしいな
おばけは　死（し）なない　病気（びょうき）も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌（うた）おう　ゲゲゲのゲー

【エンディング】

カランコロンのうた

作詞／水木しげる
作曲／いずみたく
唄・編曲／憂歌団
(WEA JAPAN)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
おばけがポストに　手紙(てがみ)を入(い)れりゃ
どこかで鬼太郎(きたろう)のゲタの音(おと)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ドッタンバッタ　ゴロゴロ
ギャアギャア　ギーギー　ドタドタ
どこかでおばけの　うめき声(ごえ)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ゲゲゲの鬼太郎(きたろう)　たたえる虫(むし)たち
どこかへ鬼太郎(きたろう)は　消(き)えて行(ゆ)く
カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン

登場キャラクター

役名	摘要	声の出演者
鬼太郎		
目玉のおやじ		
砂かけ婆		
子なき爺		
ぬりかべ		
一反木綿		
ねこ娘		
○		
村上祐子	（ゆうこ）	
谷本淳	（じゅん）	
鈴木翔太	（しょうた）	

社長	秘書	工事作業員A・B	先生	○	ねずみ男	見上げ入道						

1　ゲゲゲの森

深い森の奥――
虫やカエルたちのゲゲゲの歌が聞こえてくる。
繁った木の中程にわらぶきの小屋がしつらえられている。

目玉（声）「おーい、鬼太郎！　お湯がぬるいぞーい」

2　同・鬼太郎の家・内

と、鬼太郎、鉄瓶を手にやって来る。

鬼太郎「遅くなりました、父さん」

と――茶碗に、お湯を注ぐ――と、ファーッと茶碗から伸びる小さな手。
目玉のおやじ――頭の上に手拭いを乗せて、茶碗ぶろにつかっている。

目　玉「――極楽、極楽――、くんくん、なんじゃろう？」

鬼太郎「匂いますか、父さん？　そのお碗で納豆をまぜてしまったんです」

目　玉「納豆？　ほう、どうりで香ばしい香りじゃ」

と、気持ちよげな目玉。ホッと見やる鬼太郎。ノンビリとした雰囲気で

3 サブ・タイトル

4 小学校

郊外の閑静な所に立つ小学校。
背後に深い林が拡がっている。
その前にリムジンが停車する。
秘書、あわてて飛び出して来て、ドアを開ける。

秘　書「社長、つきました」

尊大な態度でおりてくる、社長。

5 同裏・林の中

木漏れ日がさしこみ、チチチと小鳥たちが鳴く——美しい自然。
小学校の四年生の女の子、祐子——小鳥の巣をかけている。
と、小鳥がなにかに怯えて飛び立つ。
祐子、ふと見やる——

6　同・沼辺

深い下草をかきわけ、社長と秘書が沼の辺に出て来る。
社　長「ほう、都会の真ん中に、こんな所が残っておるなんて、な」
秘　書「じつは言い伝えがございまして」
社　長「うん？」
秘　書「祠(ほこら)に手をだすとたたるというんです」
　と、草むらの中に小さな祠がある。
社長、いきなり、ズズッとチャックを下ろし、祠に立ちションを始める。
秘　書「しゃ、社長！」
社　長「ターハッハ、いまどきたたりなんかあるもんか！　ここを埋め立てて貸しビルでもたてれば、大儲けだぞ！」

オシッコが祠にかかる。

7　イメージ

闇の中にカッと輝く一つ目――。

グルルルーと不気味な唸り声。

8　林・入口

ブルドーザーを先頭にガガガとやって来る、工事用車輌。

9　小学校・校舎屋上

木立から、小鳥たちが飛び上がる。

見やっている、祐子、淳、翔太、三人の小学四年生――祐子は活発な感じの女の子。服に独特なピンズをつけている。淳は体育会系のノリの男の子。

翔太は眼鏡をかけて、いつもゲームボーイをしている小柄な男の子。

祐　子「工事始まっちゃったね」

翔　太「しようがないよ、経済優先だもん」

淳、カッカとして――

淳「このへんで遊べんのはあそこだけだったんだぜ！」

翔　太「ぼくを怒るなよ……」

淳「自然を大事になんて言っといて、大人なんて勝手だぜ！」

祐子、ポツンと――

祐　子「林がなくなったら、小鳥たち、どこに住むんだろ」

10

同裏・林の中

ブルドーザーが木立を切り開き、ダンプから土が降ろされ、沼が埋められる。

木立の陰からソッと覗く、祐子。

目の前で姿を変えつつある林。

祐子の設えた小鳥の巣も転がる。

思わず、駆け寄る祐子――

祐　子「ひどい！」

ガタン！　大きなタイヤに祠が踏みつけられて倒れる。

砕けた祠のあたりから黒い雲が天空にわき上がる。

あたり、みるみるうちに漆黒に染まる。

祐　子「?!」

雲の中から不気味な声――

見上げ（声）「人間どもめーっ！」

エッと見やる作業員たち。

ゴオオオーッと渦を巻く黒雲――　工事用車輌や作業員たちが巻き上がる。

作業員たち「わぁーっ！」

咄嗟に物陰に隠れる祐子――

祐　子「（恐怖の表情で）！」

11　同林（翌日）

モズの生贄のように木の上に真っ逆様に引っ掛かっているブルドーザー。

呆然と佇む、社長と秘書。

社　長「こ、これは?!」

秘　書「工事の作業員たちも一人のこらず、いなくなっています!」

祐子と淳と翔太、その様子を物陰から興味深げに見やっている。

社　長「誰がいったい、こんなことを!」

と、突然、祐子が進み出て――

祐　子「わたし、見ました!」

社　長「え?!」

祐　子「黒い大きな人影が、ブルドーザーや工事の人たちをあっという間に吸い込んで」

社　長「なにを寝ぼけているんだね、お嬢ちゃん――ウソはいかんぞ、ウソは!」

祐　子「ほんとなんです!」

そのとき――人波をかきわけて――

男（声）「まあまあまあ――」

エッと一同、見やると――プーンと匂う衣裳を身につけたド汚いねずみ男が登場する。

社　長「ううっ、ひどい匂いだ！」

と、ムッと胸をはり名刺を差し出す。

ねずみ男「失敬なっ！　わがはいは世界でただ一人妖怪事件専門の弁護士――ビビビのネズミ男様だ！」

唖然と見やる、一同。

ねずみ男「この奇怪な事件は妖怪の仕業にちがいない――」

社長・秘書「妖怪?!」

祐　子「怖い！」

ねずみ男「まあまあ、お嬢ちゃん、心配には及ばんよ！　世界一の妖怪弁護士がついてるんだ！」

祐　子「はい！」

と、背中から大きな算盤を取り出し、

ねずみ男「まず、手付けにこんなとこでどうだ？」

と、社長、ねずみ男の耳にメガホンを押しつけて――

社　長「うるさーいっ！」

ビックリして祐子に抱きつくねずみ男。

社　長「わしの土地からみんな、出ていけ！　工事をすぐ再開するぞーっ」

秘　書「でもこのありさまじゃ」
社　長「ばっかもん、すぐ準備するんだ！」
ねずみ男「後悔するぞっ！」
社　長「まだいたかーっ、みんな、さっさと消えうせろーっ！」

12

同小学校・校庭

祐子と淳と翔太が歩いて来る。

淳　「祐子ちゃん、ほんとに見たのかい？」
翔　太「テヘヘヘ、妖怪なんかホントにいたら、魔法の剣でやっつけてやる、さ」
祐　子「ほんとよ、わたし、ほんとに見たんだから」
淳　「信じないとは言ってないよ」
翔　太「でも、なー」

祐子、哀しげに ――

祐　子「やっぱり、信じてないのね！」

と、駆けていく、祐子。

13

同裏・林入口・近く（夕方）

ひとりトボトボと歩いて来る、祐子。

祐　子「誰も信じてくれない――また、きっと、同じような事件が起こって、犠牲になる人がでる……」

と、背後からおまわりさんが近づいて――が、顔は見えない――声をかける。

警　官「きみ、なにかあったのかね」

祐　子「ええ、でも、きっと信じてもらえないわ」

警　官「話してごらん？　なんなんだい？」

祐　子「学校の裏の林で大きな人影を見たんです。まるで入道雲のように大きくなって」

警　官「ほう――それは――」

ポトッと帽子が落ちる――と、その下、見上げ入道の顔がある。

見上げ「こんなふうだったかい」

祐　子「！」

見上げ入道、ズオオーッと成長して天を覆うほどになる。

祐　子「きゃああーっ！」

立ち尽くす祐子　――　と、巨大に成長した見上げ入道が、ズオーッと空気を吹き出すと、竜巻が起こって、クルクルと空中に舞い上がる、祐子

――胸のビンズがポロリと落ちる。

見上げ、今度はゴォーッと吸い込んで　――

見上げ「おれの胃袋に入るんだ！」

――　祐子をゴクッと呑み込む。

14　見上げ入道・食道

闇の中　――　祐子、スロープをズオーッと滑っていく。

15　同・胃袋の中

奇妙な洞窟、ドシンと天井近くの穴から落ちてくる祐子。
鐘乳石から、ヌメヌメの液体が滴っている。
祐子、頭を抱えて、気がつく。

祐　子「ううーん……、ここはどこ？　わたしはどうしちゃったのかしら……」

天井の落ちてきた穴に気がつく。

祐　子「あそこから落ちてきたのね」

祐子、穴に登ろうとするが、ヌルヌルと滑って落ちる。

祐　子「キャッ！」

鐘乳洞の陰から顔を出す作業員たち。

作業員Ａ「お嬢ちゃん、無駄だよ」

作業員Ｂ「オレたちもやってみたが、どうしても、ここからは抜けられないんだ」

と、洞窟中に響く、笑い声。

（声）「ダーッハッハッハ！　そこはわしの胃袋の中じゃ……。おまえたちは一生、その中で暮らすのじゃあ」

エッとなる一同、呆然と立ち尽くす。

16　小学校（翌日）

三々五々、登校してくる生徒たち。

17

同・五年一組

祐子の席が空いている。

先　生「村上さんは今日はお休み？」

不安げに見やる、淳と翔太。

18

同・校庭

淳、翔太が駆けてくる。

淳「祐子ちゃん、どこへ行っちゃったんだろ」

と、林の入口付近まで来て――立入り禁止のロープの近く、キランと光るものがある。

例の祐子のピンズだ。

淳「これ、祐子ちゃんのだ――まさか、妖怪に？」

翔　太「ま、まさか――そんなのゲームの中だけだろ？」

淳「噂で聞いたことがある。妖怪ポストに手紙を出すと、鬼太郎が助けに来てくれるんだって」

19 ゲゲゲの森

バタバタバタと飛来するカラス。
くわえているハガキを、カタンと、妖怪ポストの中に入れる。

20 小学校・屋上

人待ち顔の、淳と翔太。

淳「ハガキ出してから三日になるけど、鬼太郎、来てくれないな………」
翔太「妖怪とか、鬼太郎とか、やっぱり、いないんだよ」
と、どこからか、カランコロンと下駄の音――エッと入口のほうを見やる。
入口の暗がりから現れる、鬼太郎。

鬼太郎「ぼくにハガキをくれたのは、君たちかい？」
淳「き、きみが鬼太郎？」
翔太「大丈夫なの？　強そうじゃないよ」
と、どこからか――

（声）「鬼太郎にまかせておけば大丈夫！」
エッと顔を見合わせる、淳と翔太。
と、鬼太郎の肩の上にヒョイと姿を表す目玉おやじ。
淳・翔太「ひえぇーっ！」
鬼太郎「怖がることないよ。ぼくの父さんなんだ」
翔　太「目玉のパパ？」
目　玉「目玉のおやじじゃ」

21 同・校庭

駆けて来る鬼太郎と肩の目玉、ついて走る、淳と翔太。
目　玉「入道沼というと昔、えらい坊さんが見上げ入道という妖怪を封印した祠が祀ってあるはずじゃ」
鬼太郎「工事で祠を倒したりしたら、見上げ入道が蘇ってしまいますね」
淳　「今日からまた工事が始まるはずだよ！」
目　玉「大変じゃっ！」

22　林・入口

ハッと見やる鬼太郎と目玉と淳と翔太。

と、林の中、工事の音とともに木々が倒れるのが見える。

目　玉「遅かったか」

23　同・林の中

社長の乗ったブルトーザーを先頭に工事車輌が押し寄せる。

と、巫女の恰好にしめ縄を襷にしたねずみ男、榊を振り回して――

ねずみ男「おれ様のいうことをきけーっ！　妖怪のたたりがあるぞーっ！」

社　長「うるさいっ！　そこをどけーっ！」

ドーッとダンプが沼を埋めていく。

と、ボコボコッと沼が泡立つ。

つぎの瞬間、ゴオーッと幾つもの小竜巻があちこちに起こる。

社　長「な、なんだ、あれは！」

見上げ（声）「ダーッハッハッハッ！　おまえたち、この見上げ入道のすみかに、

なにをするのだ！　許さんぞーっ！」

と、竜巻、次々と工事用車輌を巻き込むと、空中に吹き上げて、ドーンッ！　と地面に叩きつける。

社長とねずみ男、逃げる後からドンドンドーンと車輌が落ちて来る。

社長、ねずみ男にすがりつく――

社　長「ね、ねずみ男先生！」

が、ねずみ男も色をなくして逃げ出している。

ねずみ男「離せ、離せ、離しやがれーっ！」

社　長「先生は世界でただひとりの妖怪弁護士でしょう！　お金はいくらでも出しますから、妖怪と話をつけてくださいっ！」

ねずみ男、ガラッと態度を変え――

ねずみ男「いくらでもっ！　その言葉にウソはねえなっ！」

社　長「も、もちろん！」

ねずみ男、サッと榊をかざして――

ねずみ男「妖怪よ、聞けーっ！」

目の前に迫った竜巻が一点に止まる。

ねずみ男「おれと手をくまねえか？　示談金をガッポリふんだくってやるぜ！」

と、竜巻の中から、声が響く。

見上げ（声）「うおぉーっ！　ふざけるな！」

ゴオォーッと竜巻が襲いかかる。

ねずみ男「ひーっ！」

ねずみ男、竜巻に巻き込まれてしまう。

24

同・林の中

駆けつける鬼太郎とその肩の目玉おやじ。

あたりは工事車輌が散乱して台風が通りすぎたような様相を呈している。

ボロボロになっている社長と秘書が、ヘナヘナと座りこんでいる。

鬼太郎「大丈夫ですか？」

社　長「ゆ、許してくださーい！　林はもとに戻して小学校に寄付しまーす」

秘　書「社長！」

と、逃げる社長を、秘書追っていく。

鬼太郎、キッと沼のほうを窺い見る。

ピンと立つ鬼太郎の髪の毛　——

鬼太郎「すごい妖気です、父さん」
目　玉「むむむ、見上げ入道！　おまえの仕業じゃな」
見上げ（声）「ターッハッハッハ」
　と、黒雲とともに、二人の前に現れる、人間サイズの見上げ入道。
見上げ「鬼太郎――　おまえが来たのか」
鬼太郎「どうしてこんなイタズラをするんだ?!　見上げ入道！」
見上げ「おまえこそ、なぜ、人間の味方をする！　やつらはオレの大事な祠を壊し、美しい林を台無しにしてしまったのじゃ。これぐらいの罰はあたりまえじゃ」
鬼太郎「だからって女の子を誘拐するなんてヒドイぞ！」
見上げ「どうやら、話しても無駄なようじゃな！」
　と、見上げ入道、ネ～ッと息を吸うとプーッとものすごい突風を吹きつける。
　凄まじい息とともに石礫が飛んで来る。
目　玉「鬼太郎、やつの弱点は目じゃ！　髪の毛バリで目を狙うのじゃ！」
鬼太郎「はいっ、父さんっ！」
　鬼太郎、ピキッとばかりに見上げ入道の眼めがけて髪の毛バリを飛ばす。

見上げ「うわっ！」

と、見事に一つ目めがけて針が突き刺さったかと思われたが――草むらの地蔵に変化する。

目　玉「しまった、変わり身じゃ！」

鬼太郎「えっ！」

と、頭上から――

見上げ「ダハハハ――　ゲゲゲの森に隠れすんでいる間に、妖力が落ちたようじゃな！」

鬼太郎と目玉おやじが見上げる。

25　同・林・上空

林の木立の向こうに、天空を覆わんばかりに巨大化した見上げ入道の姿が見える。

26　同・胃袋の中

鬼太郎「見上げ入道、女の子や工事の人たちを返せ！」

ハッと顔を上げる、ねずみ男と、祐子と作業員たち。

ねずみ男「おおっ、鬼太郎のやつ来たのか」

祐　子「鬼太郎さんって？」

ねずみ男「あいつがくれば、安心だぜ！　鬼太郎っ、おれだよ、おれっ、ねずみ男だよ」

27	同・林内

見上げ入道の腹の中から――

ねずみ男（声）「鬼太郎！　鬼太郎ーっ」

鬼太郎と目玉、ハッと見やり――

目　玉「あの声はねずみ男じゃ！」

鬼太郎「おまえも一緒なのか、ねずみ男?!」

ねずみ男（声）「鬼太郎、たすけてくれよ！」

祐子（声）「助けてくださいっ！」

鬼太郎「みんな、待っててください！」

見上げ「タハハハ、みんなの精気を消化しておれさまの妖力の源にしてやるーっ！」

目　玉「早く、助けださんと大変なことになるぞ！　いそげ、鬼太郎！」

鬼太郎「はいっ、父さん」

と、髪の毛ばりを撃とうとする鬼太郎。

見上げ「そうはさせるか、おまえも一緒にのみこんでやる！」

巨大化見上げ、大きく息を吸い込んで

見上げ「秘技、口臭竜巻！」

フーッと息を吹きつけると、林のあたり、竜巻に巻き込まれたように木々が騒ぐ。

目　玉「うわっ、たまらん匂いじゃ」

鬼太郎「父さん、岩陰に隠れてください」

目玉おやじを岩陰に隠した途端、鬼太郎の体が風に巻き込まれてフワッと浮き上がる。

鬼太郎「うわっ！」

と、スーッと大きく息を吸う、巨大化見上げ。

鬼太郎「ああーっ、父さーん！」

岩に必死にしがみつき、なす術もなく見上げる、目玉おやじ。

目　玉「鬼太郎！」

28

同・林・上空

ゴォォーッ――空中に舞い上がった鬼太郎、ドンドンと見上げ入道の口が近づいて来る。

鬼太郎「なにーっ！」

パクリ――巨大化見上げの口の中に吸い込まれてしまう、鬼太郎。

見上げ「ターッハッハッ！　見たか、この見上げ入道の力を！　妖怪のくせに人間に味方する鬼太郎なんぞ、わしの妖力にしてやる！」

29

同・林内

目玉おやじ、サメザメと涙をぬぐって――

目　玉「鬼太郎、おまえは親思いのいい子だったのにのう」

と、駆けつけるねこ娘と子なき爺。

ねこ娘「目玉おやじ、んなこと言って泣いてる場合じゃないよ！」

目玉おやじ「おお、ねこ娘に子なき爺！」

子なき爺「鬼太郎立つのしらせを聞いて、全国にちりぢりになっとった、妖怪たち

が駆けつけてくれたんじゃ」

目玉おやじ、感激して――

目　玉「やっぱり、持つべきものは友じゃのう！」

30

同・林・上空

見上げ「ええい、めんどうだ！　みんな、まとめて踏みつぶしてやる！」

と、巨大な足で目玉たちを踏みつぶそうとする。

その前の地面から白い霧が吹き出して―ズズズ―巨大な壁がせりあがってくる――ぬりかべだ！

ぬりかべ「ヌーリーカーベー」

見上げ入道とぬりかべ、ガップリと四つに組んで力くらべ――。

そこへ飛来する、一反木綿と背中に乗る砂かけ婆。

砂かけ婆「一反木綿よ！　見上げ入道の目のところへ！」

一反木綿「わかいもしたっ！」

と、見上げ入道の目の前に飛ぶ一反木綿。

砂かけ婆「砂の目潰しじゃあっ」

と、見上げ入道の目玉に砂をかける。

見上げ「ペッペッペッ！　たまらーんっ！　おのれ、みんなまとめて吹き飛ばしてやるーっ！」

ゴーッと息を吸うと、さらに巨大化する見上げ入道――その腹、パンパンに膨らんでいく。

見上げ入道、息を吹きつけようとするが、うまく吹き出せない。

見上げ入道、目を白黒させて――

見上げ「ウググ、息を吹き出せん！」

と、そのとき――口をこじ開け、飛び出してくる鬼太郎。

鬼太郎をうまく受け止める一反木綿。

31

同上空・一反木綿上

鬼太郎、砂かけ婆とともに一反木綿に乗って――

砂かけ婆「おお、鬼太郎、無事じゃったか」

鬼太郎「はい！　先祖の霊毛で編んだ妖怪ちゃんちゃんこで、見上げ入道の喉を塞いでやったんです！」

砂かけ婆「よしっ、やつのパンパンにふくらんだ腹を狙うのじゃ」
一反木綿「ゴワスッ！」
と、鬼太郎、髪の毛バリで見上げ入道の大きく膨んだ腹を狙う。
ビビビビ ―― 髪の毛バリを見上げ入道の腹部にうちこむ。
と、パーンッと破裂する見上げ。
祐　子「きゃーっ！」
と、空中に投げ出される、祐子。
と、一反木綿に乗った鬼太郎、祐子を受け止める。
バラバラと落ちてくる作業員たちを受け止める、ぬりかべ。

32　同・林の中

ヒューンッと落ちてくるねずみ男。
ねずみ男「誰かオレを受けとめてくれーっ」
子なき爺、石化する。
その上にシリからドーンと落ちるねずみ男。
ねずみ男「ヒーッ！　痔が！　持病のイボ痔がーっ！　鬼太郎！　なんでオレだけ

ほっとかれるんだよっ！」

ねこ娘「あんたの反省が足りないからよ」

と、引っ掻かれて ——

ねずみ男「ひーっ！」

33 同・林・祠近く

腹が破れてヘロヘロになって逃げる見上げ入道 ——

見上げ「これはたまらん！ 地下にもぐって作戦の練り直しじゃ」

34 同・地上

砂かけと鬼太郎、祐子を乗せた一反木綿がおりて来る。

鬼太郎「大丈夫かい？」

祐　子「は、はい……」

目玉、砂かけ婆に ——

目　玉「砂かけ婆、封印の壷はもっておるか」

砂かけ婆「準備はおこたりなしじゃ」
砂かけ婆、鬼太郎に壷を渡す。
鬼太郎「父さん、これは？」
目　玉「やつに声をかけて返事したとき、『見上げ入道、みこしたっ』と呼べば、
封印できるのじゃー」
鬼太郎「はい！　わかりました、父さん」
と、一反木綿に飛び乗る。
鬼太郎「よおしっ！　一反木綿！」
一反木綿「はいでゴワス！」
と、グーンッと急上昇して見上げ入道を追いかける、一反木綿。

35

同・林・祠近く

逃げる見上げ入道の背後につく一反木綿 ―― 鬼太郎、上空から ――
鬼太郎「見上げ入道！」
エッと振り返る見上げ入道。
見上げ「なにっ！」

鬼太郎、壷をかざして ——
鬼太郎「見上げ入道、見ーこしたっ！」
見上げ「しまったーっ！　ウワーッ！」
雲のようになって、壷の中に吸い込まれていく、見上げ入道。

36　林入口

鬼太郎と目玉おやじ、そして淳と翔太と祐子がいる。
祐　子「鬼太郎さん、助けていただいて、ほんとにありがとう」
翔　太「弱そうなんて言ってごめんね」
ニッコリ笑う、鬼太郎。
目　玉「気にせんで、ええ、ええ」
鬼太郎「ケンカが強くても自慢にならないよ。人間と妖怪、仲良くやっていければいいんだけど……」
目　玉「難しい問題じゃがな」
淳　「見上げ入道はどうなるんですか？」
鬼太郎、手にした壷を見やり ——

鬼太郎「どうしましょうね、父さん」

目　玉「こやつはもっと自然のある山の奥に眠らせてやるとするか——　妖怪は自然がないと生きていけないんじゃ」

鬼太郎「もし、この林が昔のままなら、見上げ入道も静かに眠っていられたんですね」

祐子、淳、翔太、顔を見合わせて——

祐　子「自然を壊したのは人間です。この林はわたしたちが守ります」

鬼太郎「うん。頼んだよ！」

×　　×　　×

夕陽の赤い空——。

カ——カー——カー——

カラスをたくさん束ねた、カラスヘリコプターに乗って飛び上がる鬼太郎とその肩の、目玉おやじ。

祐子と淳と翔太、手をふって——

祐　子「鬼太郎さーん！」

はるかに飛んでいく鬼太郎をいつまでも見やり——

（つづく）